

# 2021年度 東京工業大学 前期 数学

1

(1)  $10^{k-1}$  以上かつ  $10^k$  未満の整数は

$k$  桁の正の整数

である。このうち、条件 (\*) を満たすものでは

$10^{k-1}$  の位の数は  $1, 2, \dots, 8$  の 8 通り

$10^{k-1}$  の位以外の位の数はそれぞれ  $0, 1, 2, \dots, 8$  の 9 通り

となる。よって

$$a_k = 8 \cdot 9^{k-1}$$

..... (答)

(2)  $m$  を正の整数とし、整数  $n$  が  $10^{m-1} \leq n < 10^m$  を満たすとする。

このような  $n$  のうち、条件 (\*) を満たすものについて

$$\frac{1}{10^m} < \frac{1}{n} \leq \frac{1}{10^{m-1}} \quad \text{より} \quad \frac{1}{10^m} < b_n \leq \frac{1}{10^{m-1}}$$

が成り立ち、それ以外では  $b_n = 0$  である。このことにより

$$S_m = \sum_{n=10^{m-1}}^{10^m-1} b_n$$

とおいた  $S_m$  に対して次の不等式が成り立つ。

$$S_m \leq a_m \times \frac{1}{10^{m-1}} = 8 \cdot 9^{m-1} \cdot \frac{1}{10^{m-1}} = 8 \left( \frac{9}{10} \right)^{m-1}$$

よって

$$\sum_{n=1}^{10^k-1} b_n = \sum_{m=1}^k S_m \leq \sum_{m=1}^k 8 \left( \frac{9}{10} \right)^{m-1} = 8 \cdot \frac{1 - \left( \frac{9}{10} \right)^k}{1 - \frac{9}{10}} = 80 \left\{ 1 - \left( \frac{9}{10} \right)^k \right\} < 80$$

(証明終わり)

2

(1)  $l$  と  $E$  の共有点の  $x$  座標は、方程式

$$\frac{x^2}{4} + (ax + b)^2 = 1$$

の実数解であり、この方程式を変形すると

$$\left(a^2 + \frac{1}{4}\right)x^2 + 2abx + (b^2 - 1) = 0 \quad \dots \textcircled{1}$$

となる。①の判別式を  $D$  とおく。  $D$  は

$$D = 4a^2b^2 - 4\left(a^2 + \frac{1}{4}\right)(b^2 - 1) = 4a^2 + 1 - b^2$$

である。  $l$  と  $E$  が異なる 2 点を共有するための条件は、  $D > 0$ 、すなわち

$$-\sqrt{4a^2 + 1} < b < \sqrt{4a^2 + 1} \quad \dots \textcircled{\text{答}}$$

である。

(2)  $l$  と  $m$  がそれぞれ  $E$  と異なる 2 点を共有していることより

$$-\sqrt{4a^2 + 1} < b < \sqrt{4a^2 + 1}, \quad -\sqrt{4a^2 + 1} < c < \sqrt{4a^2 + 1} \quad \dots \textcircled{2}$$

であり、これと

$$b > c \quad \dots \textcircled{3}$$

が成立している。  $l \parallel m$  に注意すると、  $\overrightarrow{PQ} = \overrightarrow{SR}$  となるのは

$$(l \text{ と } E \text{ の 2 交点の } x \text{ 座標の差}) = (m \text{ と } E \text{ の 2 交点の } x \text{ 座標の差}) \quad \dots \textcircled{4}$$

のときである。ここで、①の解は  $x = \frac{-4ab \pm 2\sqrt{D}}{4a^2 + 1}$  であるから

$$(l \text{ と } E \text{ の 2 交点の } x \text{ 座標の差}) = (\textcircled{1} \text{ の 2 解の差}) = \frac{4\sqrt{D}}{4a^2 + 1} = \frac{4\sqrt{4a^2 + 1 - b^2}}{4a^2 + 1}$$

であり、  $b$  を  $c$  におきかえて

$$(m \text{ と } E \text{ の 2 交点の } x \text{ 座標の差}) = \frac{4\sqrt{4a^2 + 1 - c^2}}{4a^2 + 1}$$

である。よって④は  $b^2 = c^2$ 、すなわち  $c = \pm b$  となり、これと③より

$$c = -b \quad \dots \textcircled{5}$$

となる。⑤を②と③に代入して整理すると  $0 < b < \sqrt{4a^2 + 1}$  となる。求める条件は、②かつ③かつ⑤、すなわち

$$0 < b < \sqrt{4a^2 + 1}, \quad c = -b \quad \dots \textcircled{6}$$

となる。

(3)  $E$  に内接する平行四辺形を考える。その平行四辺形の辺を含む 4 直線のうちの 2 本は (2) の  $l$ ,  $m$  のように表すことができ、⑥が成立する。  $c = -b$  より、原点のまわりの  $180^\circ$  回転で、  $E$  は  $E$  に、  $l$  は  $m$  にうつるから、  $P$  は  $R$  に、  $Q$  は  $S$  にうつる。よって対角線  $PR$ ,  $QS$  の中点は原点である。以上から、  $E$  に内接する平行四辺形の対角線の中点は原点である。平行四辺形が正方形になるための条件は、対角線の長さが等しく直交することであるから、点  $(u, v)$  が、  $E$  に内接する正方形の頂点であるための条件は

$(u, v)$  が  $E$  上にあり、かつ  $(u, v)$  を原点のまわりに  $90^\circ$  回転した点  $(-v, u)$  も  $E$  上にあること、すなわち

$$\frac{u^2}{4} + v^2 = 1 \text{ かつ } \frac{v^2}{4} + u^2 = 1$$

である。これを解くと、 $u^2 = \frac{4}{5}$  かつ  $v^2 = \frac{4}{5}$ ，すなわち

$$(u, v) = \left( \pm \frac{2}{\sqrt{5}}, \pm \frac{2}{\sqrt{5}} \right) \text{ (複号任意)}$$

となる。以上から、求める4点の組は

$$\left( \pm \frac{2}{\sqrt{5}}, \pm \frac{2}{\sqrt{5}} \right) \text{ (複号任意)}$$

.... (答)

である。

3

(1)

$$n {}_{2n}C_n = n \cdot \frac{(2n)!}{n!n!} = \frac{(2n)!}{(n-1)!n!}$$

$$(n+1) {}_{2n}C_{n-1} = (n+1) \cdot \frac{(2n)!}{(n-1)!(n+1)!} = \frac{(2n)!}{(n-1)!n!}$$

であるから,

$$n {}_{2n}C_n = (n+1) {}_{2n}C_{n-1}$$

が成り立つ.

(証明終)

右辺の  $(n+1) {}_{2n}C_{n-1}$  は  $n+1$  の倍数だから左辺の  $n {}_{2n}C_n$  も同じく  $n+1$  の倍数であるが,  $n$  と  $n+1$  は互いに素であるから,  ${}_{2n}C_n$  は  $n+1$  の倍数である. (証明終)

(前半別解)

与えられた等式の両辺を次のように解釈する.

左辺...  $2n$  人の中から  $n$  人選んで組を作り, その  $n$  人の中からさらに代表を 1 人選ぶ  
 選び方の総数

右辺...  $2n$  人の中から  $n-1$  人選んで組を作り, 残る  $n+1$  人の中からこの組の代表を  
 1 人選んで合計  $n$  人の組にする選び方の総数

結果的にどちらも,  $2n$  人の中から  $n$  人の組とその中の代表 1 人を選ぶ方法の総数を表していることに変わりはない. よって両辺は等しい. (証明終)

(2) 正の整数  $n$  に対して, (1) より  $a_n = \frac{{}_{2n}C_n}{n+1}$  は整数である. そして, 正の整数  $n$  に対して,

$$\begin{aligned} \frac{a_{n+1}}{a_n} &= \frac{{}_{2n+2}C_{n+1}}{n+2} \cdot \frac{n+1}{{}_{2n}C_n} \\ &= \frac{n+1}{n+2} \cdot \frac{(2n+2)!}{(n+1)!(n+1)!} \cdot \frac{n!n!}{(2n)!} \\ &= \frac{2(2n+1)}{n+2} \end{aligned}$$

$$\therefore a_{n+1} = \frac{2(2n+1)}{n+2} a_n \quad \dots \textcircled{1}$$

が成り立つ. これを用いて,  $n$  が 4 以上の整数ならば

$$a_n > n+2 \quad \dots (*)$$

であることを数学的帰納法により示す.

(I)  $n=4$  のとき

$$a_4 = \frac{{}_8C_4}{5} = 14 > 6 = 4+2$$

より,  $n=4$  のとき(\*)は成り立つ.

(II)  $k$  を 4 以上の整数とし,  $n=k$  のとき(\*)が成り立つ, つまり

$$a_k > k+2 \quad \dots \textcircled{2}$$

が成り立つと仮定すると,

$$\begin{aligned} a_{k+1} - \{(k+1)+2\} &= \frac{2(2k+1)}{k+2} a_k - (k+3) \\ &> \frac{2(2k+1)}{k+2} \times (k+2) - (k+3) \quad (\because \textcircled{2} \text{より}) \\ &= 4k+2 - (k+3) \\ &= 3k-1 \geq 3 \cdot 4 - 1 > 0 \end{aligned}$$

よって,  $a_{k+1} > (k+1)+2$  が成り立つから,  $n=k+1$  のときも(\*)が成り立つ.

したがって,  $n$  が 4 以上の整数ならば  $a_n > n+2$  が成り立つ. (証明終)

(別解)

$n \geq 4$  のとき

$$\begin{aligned} a_n &= \frac{{}^{2n}C_n}{n+1} \\ &= \frac{(2n)!}{(n+1)!n!} \\ &= \frac{2n \cdot (2n-1) \cdot \dots \cdot (n+3) \cdot (n+2)}{n \cdot (n-1) \cdot \dots \cdot 1} \cdot (n+2) \\ &= \frac{2n-1}{n-1} \cdot \frac{2n-2}{n-2} \cdot \dots \cdot \frac{n+3}{3} \cdot (n+2) \quad [n \geq 4 \text{ ならば } 2n-1 \geq n+3, n-1 \geq 3 \text{ である}] \\ &> 1 \cdot 1 \cdot \dots \cdot 1 \cdot (n+2) \\ &= n+2 \end{aligned}$$

したがって,  $n$  が 4 以上の整数ならば  $a_n > n+2$  が成り立つ. (証明終)

(3) まず(2)より, すべての正の整数  $n$  に対して  $a_n$  は整数である.  $a_1 = \frac{{}^2C_1}{2} = 1$ ,  $a_2 = \frac{{}^4C_2}{3} = 2$ ,

$a_3 = \frac{{}^6C_3}{4} = 5$ ,  $a_4 = \frac{{}^8C_4}{5} = 14$  であるから,  $a_2, a_3$  は素数であり,  $a_1, a_4$  は素数でない.

$n$  が 4 以上の整数のとき,  $a_{n+1}$  が素数でないことを背理法で示す.  $n \geq 4$  かつ  $a_{n+1}$  が素数であると仮定する.

$$a_{n+1} = \frac{{}^{2n+2}C_{n+1}}{n+2} = \frac{(2n+2)!}{(n+2)!(n+1)!}$$

であり, 分子に含まれる最大の素因数を  $p$  とすると,  $p \leq 2n+1$  であるから,  $a_{n+1} \leq 2n+1$ .

一方, ①より

$$a_{n+1} = \frac{2(2n+1)}{n+2}a_n = \left(4 - \frac{6}{n+2}\right)a_n \geq \left(4 - \frac{6}{4+2}\right)a_n = 3a_n$$

(2)より、 $n$ が4以上の整数ならば $a_n > n+2$ であるから、

$$a_{n+1} \geq 3a_n > 3(n+2) = 3n+6 > 2n+1$$

これは $a_{n+1} \leq 2n+1$ に矛盾する。

したがって、 $n$ が4以上の整数のとき $a_{n+1}$ は素数ではない、つまり $n$ が5以上の整数のとき $a_n$ は素数ではない。

以上より、 $a_n$ が素数となる正の整数 $n$ の値は

$$n = 2, 3$$

…(答)

4

(1)  $|\vec{a}| = |\vec{b}| = |\vec{c}| = |\vec{d}| = 1$  より

$$AB^2 = |\vec{AB}|^2 = |\vec{b} - \vec{a}|^2 = |\vec{b}|^2 - 2\vec{b} \cdot \vec{a} + |\vec{a}|^2 = 2 - 2\vec{a} \cdot \vec{b}$$

であり, 同様にして

$$BC^2 = 2 - 2\vec{b} \cdot \vec{c}, \quad CA^2 = 2 - 2\vec{c} \cdot \vec{a},$$

$$AD^2 = 2 - 2\vec{a} \cdot \vec{d}, \quad BD^2 = 2 - 2\vec{b} \cdot \vec{d}, \quad CD^2 = 2 - 2\vec{c} \cdot \vec{d}$$

である. よって

$$\begin{aligned} F &= 2 \left\{ (2 - 2\vec{a} \cdot \vec{b}) + (2 - 2\vec{b} \cdot \vec{c}) + (2 - 2\vec{c} \cdot \vec{a}) \right\} \\ &\quad - 3 \left\{ (2 - 2\vec{a} \cdot \vec{d}) + (2 - 2\vec{b} \cdot \vec{d}) + (2 - 2\vec{c} \cdot \vec{d}) \right\} \\ &= -6 - 4(\vec{a} \cdot \vec{b} + \vec{b} \cdot \vec{c} + \vec{c} \cdot \vec{a}) + 6(\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \cdot \vec{d} \end{aligned}$$

である.

また

$$F' = k(\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \cdot (\vec{a} + \vec{b} + \vec{c} - 3\vec{d})$$

とおく. これらの  $F, F'$  に対して

$$\vec{a} = \vec{b} = \vec{c} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \vec{d} = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

とすると

$$F = -6 - 4(1 + 1 + 1) + 6 \cdot (-3) = -36$$

$$F' = k \begin{pmatrix} 3 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} 6 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} = 18k$$

であるから,  $S$  上のすべての点  $A, B, C, D$  に対して  $F = F'$  となるには  $k = -2$  でなければならない.逆に,  $k = -2$  のとき

$$\begin{aligned} F' &= -2(\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \cdot (\vec{a} + \vec{b} + \vec{c} - 3\vec{d}) \\ &= -2|\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}|^2 + 6(\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \cdot \vec{d} \\ &= -2(|\vec{a}|^2 + |\vec{b}|^2 + |\vec{c}|^2 + 2\vec{a} \cdot \vec{b} + 2\vec{b} \cdot \vec{c} + 2\vec{c} \cdot \vec{a}) + 6(\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \cdot \vec{d} \\ &= -6 - 4(\vec{a} \cdot \vec{b} + \vec{b} \cdot \vec{c} + \vec{c} \cdot \vec{a}) + 6(\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \cdot \vec{d} \end{aligned}$$

であるから,  $S$  上のすべての点  $A, B, C, D$  に対して  $F = F'$  となる.以上より,  $F$  は  $F'$  の形に書け

$$k = -2$$

……(答)

である. ■

(2)  $\vec{g} = \frac{\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3}$  とおくと,  $|\vec{d}| = 1$  より

$$F = -2 \left\{ 3\vec{g} \cdot (3\vec{g} - 3\vec{d}) \right\} = -18 \left( |\vec{g}|^2 - \vec{g} \cdot \vec{d} \right)$$

$$= -18 \left| \vec{g} - \frac{1}{2}\vec{d} \right|^2 + \frac{9}{2} |\vec{d}|^2 = -18 \left| \vec{g} - \frac{1}{2}\vec{d} \right|^2 + \frac{9}{2} \leq \frac{9}{2}$$

である. 例えば

$$\vec{a} = \frac{1}{4} \begin{pmatrix} 2\sqrt{3} \\ 0 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad \vec{b} = \frac{1}{4} \begin{pmatrix} -\sqrt{3} \\ 3 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad \vec{c} = \frac{1}{4} \begin{pmatrix} -\sqrt{3} \\ -3 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad \vec{d} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

とすると  $|\vec{a}| = |\vec{b}| = |\vec{c}| = |\vec{d}| = 1$  かつ  $\vec{g} = \frac{1}{2}\vec{d}$  が成り立つので,  $F \leq \frac{9}{2}$  の等号が成立する. よって

$$M = \frac{9}{2} \quad \dots\dots(\text{答})$$

である.

(3)  $F = M$  となるのは  $\vec{g} = \frac{1}{2}\vec{d}$  すなわち

$$\frac{\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3} = \frac{1}{2}\vec{d}$$

のときである. これを変形すると

$$\frac{\vec{a} + \vec{b}}{2} = \frac{3}{4}\vec{d} - \frac{1}{2}\vec{c}$$

となる.  $\vec{e} = \frac{3}{4}\vec{d} - \frac{1}{2}\vec{c}$  とおくと

$$\vec{e} = \frac{3}{4} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} - \frac{1}{8} \begin{pmatrix} -1 \\ \sqrt{15} \\ 0 \end{pmatrix} = \frac{1}{8} \begin{pmatrix} 7 \\ -\sqrt{15} \\ 0 \end{pmatrix}$$

であるから

$$|\vec{e}| = \frac{1}{8} \sqrt{49 + 15 + 0} = 1$$

である. よって,  $\vec{OE} = \vec{e}$  で点 E を定めると E も S 上の点である. ここで, A と B が S 上の異なる 2 点であると仮定すると

$$\frac{\vec{a} + \vec{b}}{2} = \vec{e}$$

より, E は S の内部にあることになり矛盾である. よって, A と B は一致して,  $\vec{a} = \vec{b} = \vec{e}$  より

$$A \left( \frac{7}{8}, -\frac{\sqrt{15}}{8}, 0 \right), \quad B \left( \frac{7}{8}, -\frac{\sqrt{15}}{8}, 0 \right) \quad \dots\dots(\text{答})$$

である.



## 5

(1)  $A(0, a)$  とし,  $y = x^2$  上の点  $P(t, t^2)$  と点  $A$  との距離の 2 乗  $AP^2$  を  $f(t)$  とする.

$C$  が  $y \geq x^2$  で表される領域に含まれる

$\iff$  曲線  $y = x^2$  上のすべての点  $P$  に対して  $AP \geq a$  が成り立つ

$\iff$  曲線  $y = x^2$  上のすべての点  $P$  に対して  $AP^2 \geq a^2$  が成り立つ

$\iff$  すべての実数  $t$  に対して  $f(t) \geq a^2$  が成り立つ .....(\*)

であるから, (\*) となるような  $a$  の範囲を求めればよい.

$$\begin{aligned} f(t) - a^2 &= \{(t-0)^2 + (t^2 - a)^2\} - a^2 \\ &= t^4 - (2a-1)t^2 \\ &= t^2\{t^2 - (2a-1)\} \end{aligned}$$

であるから

$$(*) \iff -(2a-1) \geq 0$$

である. よって, 求める  $a$  の範囲は

$$0 < a \leq \frac{1}{2} \quad \text{..... (答)}$$

である.

(2)  $y = x^2 - x^4$  上の点  $Q(t, t^2 - t^4)$  と点  $A$  との距離の 2 乗  $AQ^2$  を  $g(t)$  とする.

$C$  が  $y \geq x^2 - x^4$  で表される領域に含まれる

$\iff$  曲線  $y = x^2 - x^4$  上のすべての点  $Q$  に対して  $AQ \geq a$  が成り立つ

$\iff$  曲線  $y = x^2 - x^4$  上のすべての点  $Q$  に対して  $AQ^2 \geq a^2$  が成り立つ

$\iff$  すべての実数  $t$  に対して  $g(t) \geq a^2$  が成り立つ .....(\*\*)

であるから, (\*\*) となるような  $a$  の範囲を求めればよい.

$$\begin{aligned} g(t) - a^2 &= \{(t-0)^2 + (t^2 - t^4 - a)^2\} - a^2 \\ &= t^8 - 2t^6 + (2a+1)t^4 - (2a-1)t^2 \\ &= t^2\{t^6 - 2t^4 + (2a+1)t^2 - (2a-1)\} \\ &\quad \underbrace{\hspace{10em}}_{h(t) \text{ とおく}} \end{aligned}$$

であるから, これが常に 0 以上となるためには  $t \neq 0$  において常に  $h(t) \geq 0$  となることが必要で, そのためには

$$h(0) \geq 0$$

すなわち

$$(0 <) a \leq \frac{1}{2}$$

となることが必要である. なぜなら,  $h(0) < 0$  であるとする, 0 に十分近い  $t$  に対して  $h(t) < 0$  となるからである.

逆に  $0 < a \leq \frac{1}{2}$  のとき、(1) より円  $C$  は  $y \geq x^2$  の表す領域に含まれるから、 $y \geq x^2 - x^4$  の表す領域にも含まれる。

なぜなら、すべての実数  $x$  に対して

$$x^2 \geq x^2 - x^4$$

が成り立つことにより、 $y \geq x^2$  で表される領域は  $y \geq x^2 - x^4$  で表される領域に含まれるからである。

以上より、求める  $a$  の範囲は

$$0 < a \leq \frac{1}{2} \quad \dots\dots (\text{答})$$

である。

(3) まず、 $y = x^2 - x^4$  のグラフの概形を調べる。

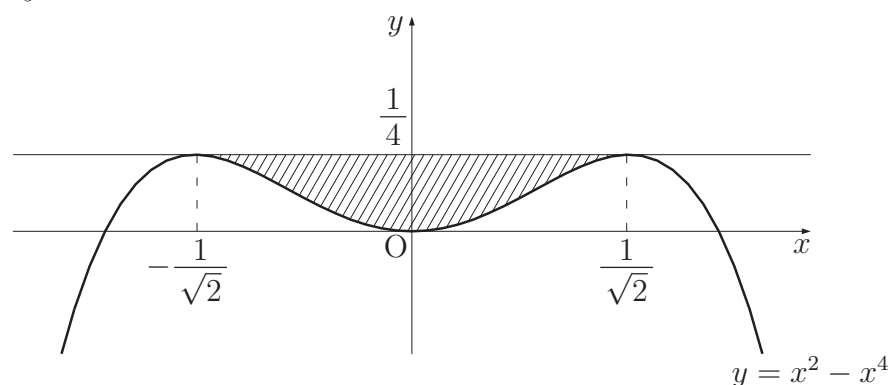
$y = x^2 - x^4$  は偶関数だからそのグラフは  $y$  軸に関して対称である。

$$y' = 2x - 4x^3 = -4x\left(x^2 - \frac{1}{2}\right)$$

であるから、 $x \geq 0$  における増減表は下のようになる。

$x$	0	...	$\frac{1}{\sqrt{2}}$	...
$y'$		+	0	-
$y$	0	↗	$\frac{1}{4}$	↘

ゆえに、 $y = x^2 - x^4$  のグラフの概形は下図のようになる。



上図斜線部を  $D$  とし、 $D$  を  $y$  軸の周りに 1 回転させてできる立体の体積を  $V_1$  とする。まず  $V_1$  を求める。

$$y = x^2 - x^4 \quad \left(0 \leq x \leq \frac{1}{\sqrt{2}}\right) \text{ とおくと}$$

$$dy = (2x - 4x^3) dx$$

であるから

$$\begin{aligned}
V_1 &= \int_0^{\frac{1}{4}} \pi x^2 dy \\
&= \int_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \pi x^2 (2x - 4x^3) dx \\
&= \pi \int_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} (2x^3 - 4x^5) dx \\
&= \pi \left[ \frac{1}{2}x^4 - \frac{2}{3}x^6 \right]_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \\
&= \frac{\pi}{24}
\end{aligned}$$

である.

以下, 求める体積を  $V$  とする.

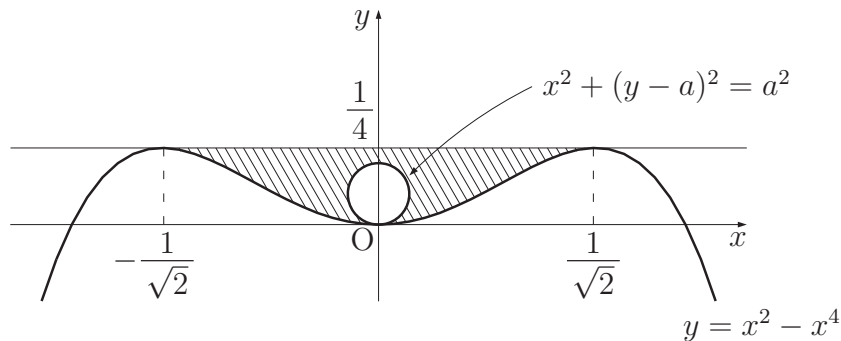
円  $C$  が領域  $D$  に含まれるのは

$$2a \leq \frac{1}{4} \quad \text{すなわち} \quad 0 < a \leq \frac{1}{8}$$

のときである.  $a$  と  $\frac{1}{8}$  の大小で場合分けする.

(i)  $0 < a \leq \frac{1}{8}$  のとき

$V$  は, 下図斜線部を  $y$  軸の周りに 1 回転させてできる立体の体積である.



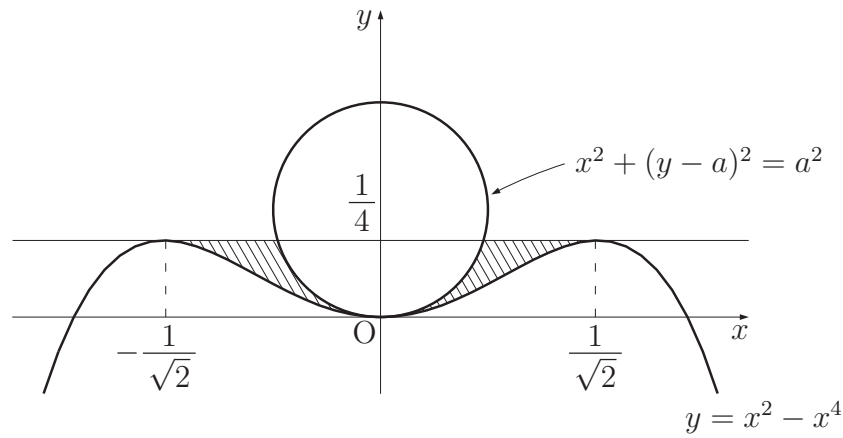
ゆえに

$$\begin{aligned}
V &= V_1 - \frac{4}{3}\pi a^3 \\
&= \frac{\pi}{24}(1 - 32a^3)
\end{aligned}$$

である.

(ii)  $\frac{1}{8} \leq a \leq \frac{1}{2}$  のとき

$V$  は、下図斜線部を  $y$  軸の周りに 1 回転させてできる立体の体積である。



ゆえに

$$\begin{aligned}
 V &= V_1 - \int_0^{\frac{1}{4}} \pi \{a^2 - (y - a)^2\} dy \\
 &= V_1 - \int_0^{\frac{1}{4}} \pi (2ay - y^2) dy \\
 &= V_1 - \pi \left[ ay^2 - \frac{1}{3} y^3 \right]_0^{\frac{1}{4}} \\
 &= V_1 - \pi \left( \frac{1}{16} a - \frac{1}{192} \right) \\
 &= \frac{\pi}{64} (3 - 4a)
 \end{aligned}$$

である。

以上より

$$V = \begin{cases} \frac{\pi}{24} (1 - 32a^3) & \left( 0 < a \leq \frac{1}{8} \text{ のとき} \right) \\ \frac{\pi}{64} (3 - 4a) & \left( \frac{1}{8} \leq a \leq \frac{1}{2} \text{ のとき} \right) \end{cases}$$

…… (答)

である。